

子どもたちの明日

Children, Our Future



目次

- ・ 村人たちが祝った「国際子どもの日」 1頁
- ・ 研修報告 藍染めの青をもとめて 2頁
- ・ 育てカンボジアの子ら（2）
「布チョッキン」と農村の暮らし 3頁
- ・ 絹絵紺・ピダンのふるさとを訪ねて 4頁



50キロ用の米袋の中で飛び跳ねる子どもたち。声援が飛び交い、笑い声に満ちた 三村合同「子どもの日」のイベント。楽しくて、晴れやかな一日でした。

① 村人たちが祝った「国際子どもの日」

「村の幼稚園」と初めての「子どもの日」

今年6月3日、タケオ州パティ郡にある三つの「村の幼稚園」が、各村の地域リーダーたちと「国際子どもの日」のイベントを企画しました。その朝、遠いトロピエンクロラン村の幼稚園の子どもたちは、両親や兄弟、おじいちゃん・おばあちゃんと連れ立って、トラックで会場のカンダール村の幼稚園にやってきました。集まった人たちは陽よけテントの下で、この日が子どもの幸せを世界中で祝う特別な日だという話を聞きました。これまでカンボジアの祝祭日しか頭になかった村人です。

子どもたちは風船やおやつ、豆乳やジュースをもらって大喜び。嬉しそうな子どもを取り巻くのは、楽しげな家族や村の幼稚園関係者です。集まった人は全部で160人。ゲームで遊ぶ園児に声援を送ったりおしゃべりをしたり、だれもが楽しくてしょうがないという雰囲気でした。「こんな催しを年に2-3回はやって欲しい」「今まで村に幼稚園がなくて、こんなイベントはなかった。珍しくて面白い」「色んな人の協力でみんなの関係

が良くなった」という声もありました。

地域とCYKが大事にする保育環境

「子どもの日」を祝った三つの「村の幼稚園」は、CYK（カンボジア事務所）が村人たちを支援してもっと普及させたいと考える幼児教育です。保育専用の建物がなくても村の集会所などを利用し、子どもたちに心の通った保育の場を用意することです。園舎も保育者も、教材も資金もない農村で、子どもたちが熱心な保育者に守られて、友だちと楽しく遊べる環境をつくりたい。CYKは長い間、答えを探してきました。そしてヒントを得たのは、政府が国際援助で始めた、農村向けの短時間保育（公立地域幼稚園）の方式でした。専用建物なしの低コストで、地域住民が運営できる保育です。これが「村の幼稚園」で、村人の関心を育てながら3年前から普及につとめている保育形態です。地域の人、ことに保護者が、就学前教育の大切さを理解できるような働きかけで、保育者を育てる研修と実践の観察はCYKの役割です。

自主運営のきざし

「子どもの日」イベントに先駆けて、開園一年に近い三つの「村の幼稚園」が、初めての合同保護者会を開きました。地域の地区長が保護者たちにこんな話をしました。「子どもや孫に勉強をさせたいなら、今が一番。毎日、幼稚園に送ってください。幼児教育を通して勉強が好きになれば、ずっと勉強が続けたい。読み書きができれば工場で働いてもエアコン付きの部屋で仕事だが、読み書きできない人は暑いところで力仕事です。今のうちに教育の準備をさせてください。」

集会后、ある保護者が、集会所の壁や天井補修用にヤシの葉を持ってくるといふと、もう一人が補修は自分がすると名乗り出ました。そして最後に、別の一声がありました。「これからは集会所を使うというだけでなく、村の幼稚園を借りるといおう。」自主運営の動きの始まりです。

「みんなで布チョッキン」活動は、着実に農村の幼児教育への理解を深め、村人の努力を支えています。

藍染めの青をもとめて

プノンペンから北東約120キロの川岸、豊かなメコンの流れに沿うコンポンチャム州アンコールバーン村は、古くは藍染めの産地として知られていました。川辺の肥えた土には、豆や胡麻、トウモロコシがよく育ちます。かつてこの村で泥藍づくりをしていたと聞いたのがきっかけで、下調べに村を訪れたのは2006年のことでした。果たして村の年寄が「昔、ポルポト時代にも、藍（インド藍）の栽培に精を出す人たちがいた」と話してくれました。

藍染めの歴史をよみがえらせる

以来、CYK（カンボジア事務所）は、途絶えたかに見えた藍づくりを復活させたいと、藍色づくりを試みてきました。葉藍から上質の藍染料を採り出し、ムラのない美しい青を木綿・絹糸に定着させるのは容易ではありません。しかし、実現すれば藍づくりの伝統が復活するだけでなく、女性たちが農作業のかたわら藍を育てて藍染料をつくり、染め糸や藍染料を売ることができます。技術上の問題が多く試行錯誤の末、専門的な指導による研修の希望が見えたのは一昨年、2012年でした。研修の趣旨を認める助成が実現し、3年計画の実施が具体化したのです。藍染研修が必要だった理由は他にもありました。プノンペンの南、タケオ州CYK織物研修センターでは、広がりのある天然染料の色合を出すために良質の藍染料が必要でした。例えば、藍とプロフー樹皮液を組み合わせると、糸は黄味がかかった緑色に染まり、従来の天然染料では出せなかった新しい染め色になります。

染め液づくりと藍染めへの挑戦

藍建て、泥藍作り、藍染めの技術研修には、藍の研究と実践で知られる沖縄「やまあい工房」の上山和男・弘子

夫妻の指導を得ることができました。研修2年目、ムラのない美しい藍色の木綿糸が仕上がりと、自ら育てた葉藍の発色過程を学んだ女性たちを喜ばせました。各工程で大事な点は、葉藍の発育状況にあった刈取り時期、発酵藍の葉を取り除くタイミング、染め色を変えてしまう天候・陽射しへの配慮です。今年のテーマ、絹糸染めは大変難しいとされるだけに、誰もが色素が落ち着く3ヶ月後の結果を心待ちにしています。

将来の地域活性を願う女性たち

刈り取った数百キロずつの葉藍を水に浸け発酵を待つ仕事は、体力と根気が勝負です。泥藍と染め液作りは、村の女性7人とCYK職員4人の協働作業です。まず山のような葉藍を折り発酵させます。次に漉した石灰液を醗酵液に加え、液が青色になるまでかき混ぜます。これを一晩置くと色素が沈殿します。つぎに上澄み液を捨てた沈殿藍の液体を、地面の穴に敷いた布濾しに注ぎ、水分を抜いて粘質の泥藍に仕立てます。

作業場を提供した女性は四児の母。藍染め布ができたなら、メコン川を渡ってくる観光客に売りたいと考えています。ある研修生は、織物研修に期待を寄せています。泥藍づくりを学んだ女性たちが技術を生かして自活する日も遠くないはず。CYKも泥藍を生かした美しい色の織物製品を作り、織物研修センターが自主運営できる日を目指しています。

注：研修は日本国際協力財団の助成金により2012年度から3年にわたりコンポンチャム州アンコールバーン村で行われた。



5000年の歴史がある藍。染め液は刈り取った藍の枝葉を発酵させて作ります。作業に庭を提供した主婦（中央）は、濃淡の藍の布を売の日を思い描いています。



藍の華と呼ばれる発酵した藍の泡。緑色や青色の美しい気泡こそ、藍染め液の生命です。これから熟成した藍色が生まれます。



染め液ができると、各自3キロの絹糸を染めます。糸を染め液に浸し、取り出して絞り、ほぐして乾かす。空気に触れた糸を再度染め液に戻し、水洗いの後、乾燥させる。片時も気を抜かない作業の連続です。



染め上がりの絹糸は息をのむほど美しい。澄んだ空より青い糸はムラがなく、色落ちしない。藍色づくりの成果は色素が落ち着く3ヶ月後に現れます。

「布チョッキン」と農村の暮らし

裁断布から遊具をつくる「みんなで布チョッキン」活動が、今年になって大きく広がっています。会の職員と共に「布チョッキン」実践に力を入れるのは、学生・主婦・企業の社会貢献グループ・地域団体メンバーなど、実に多彩な顔ぶれです。持ち寄った布を、ボールと人形の型紙通りに裁断し、寄付と共にカンボジアに送ると、村の女性が縫い、縫い賃を受けとります。縫いあがったボールや人形は、CYK事務所が農村の保育施設に届け、子どもたちがそれで遊びます。「気軽にでき、子どもたちに喜ばれるボランティア活動」と評されるこの活動は、型紙通りに切った布と寄付金が、貧しい家族の現金収入になり、それが保育所の給食代、保育に慣れない村の保育者の研修費用にかかります。この過程は将来、村単位の保育自主運営を根付かせるための試みですが、わずかな縫い賃を頼りにする家族の努力にも目をむけなければなりません。

村の家族と子どもたち

プノンペンから車で1時間半の距離にあるカンダール州の農村で、布ボールを縫う数家族に話を聞きました。タブロム村の男児（6歳・写真右上）の家族は、小学校卒の父親が用水路で魚を捕り、農作業の手伝いをしています。工場に働いていた母は今、家で子ども3人の世話です。一家5人の家計費は5000 - 10000リエル/日（約130 - 260円）。用水が潤れ、今は食用の魚がいません。農作業の機械化が進み農家が人を雇わないので、仕事もありません。仕方なく野ネズミや蛇を捕まえ、田んぼの青物を食べています。時々お米も足りなくなります。同じ村の6歳の少女の父親は魚捕りで、今はプノンペンで三輪タクシーの運転手です。村に戻るのは数日



家の前の小さな姿はセンホン君と9歳の姉さん。「幼稚園は毎日いく」大好きな先生がいて英語も教えてくれる。男の子は大きくなったら有名な歌手になるという。

に一度、家計と借金返済用に40000から60000リエル（約1050 - 1600円）を持ち帰ります。母親は学校を出ていません。「娘は学校が好きで踊り手になりたいというけれど、読み書きを覚えたら工場で働かせたい」と若い母は話します。別の家族、7歳と8歳の姉妹の両親は、小学6年と4年で退学。魚捕りと米づくりの暮らしです。どの家族も、月々定数10個の布ボールを縫い、労賃400円相当を手に入れます。これは食費や学費の一部、小遣いにもなります。一方、形が複雑な人形を縫うのは、人形で遊ぶ子どもたちをよく知る保育者たちです。これは幼い難民を考える会が20年来の支援を続けるカンダール州保育所で、保育者の薄給を補う副収入源です。

遊具と募金をもっと増やしたい

カンダール州には公立幼稚園がいくつもありますが、予算がなく室内遊具も教材もない状態でした。この実態がわかった2004年、CYKは遊具・教材を届け、保育研修を始めました。2005年からは他州の公立幼稚園

への研修費補助、遊具・教材支援が加わっています。現在、遊具・教材援助は、12州全域の公立幼稚園に行き渡りました。他にも、国際援助による農村の公立地域幼稚園451施設がリストに上がっています。今年度の配布計画にあるのは、「政府とNGO8団体の保育施設用の人形1470体とボール3670個」ですが、その数はまだ足りません。

心強いことに、この夏「布チョッキン」活動に加わった「夏の体験ボランティア」の大学、高校、中学生8名の若者たちが、遊具づくりの整理に取り組んでくださいました。



保育者は数少ない男性。背伸びしながら先生に伝える子どもたちは、人形に話しかける先生と気持ちひとつ。先生を慕う子どもたちが毎日たくさん通ってくるタブロム村の幼稚園。

今年4月、幼い難民を考える会から、カンボジアの絹絵絣・ピダンをテーマにしたカレンダーとハガキを制作したいとの依頼を受けました。伝統ある精緻な織物の感触を、スタジオ撮影では表せない、自然な味わいを生かす方法はないか。考えあぐねた結果、ピダンが生まれたカンボジアの空気の中で撮影することを思いつきました。

撮影の骨子として考えたのは、まず、長い間の戦争や武力紛争の結果、ピダンの伝統技術が衰退した現在、絹織物のふるさとタケオ州で古いピダンが奉納されている寺院を訪ねること。そして、その精緻な織布を天蓋として飾り、婚礼や葬礼の場として大切にしてきた人々の想いを感じる。さらにCYKが支援している織物研修センターでの、気の遠くなるような制作過程を見学することでした。

雨季を迎えた6月のカンボジアは、夕方になるとスコールがやって来ます。そのためカンボジアの風を感じる野外風景の中での撮影は、時間的にきびしいスケジュールになりました。それでも運良く恵まれた天候の中で、玉虫のように輝くピダン布の表情が良くわかる光を探ることができ、事前に準備されたピダンを

飾るための竹竿と支え柱を設置して、ピダンの撮影は順調に進みました。

二日間通った織物研修センターでは、人々の根気がある染織作業が続いていました。明るい笑顔がそろった記念写真も撮れました。また、プレイタトウ保育所の子どもたちの楽しげな遊戯も撮影し、有意義な時間を過ごすことができました。

プノンペンにあるCYK運営の店舗ピダン・クメールでは、職員を対象にしたデジカメ撮影講座を開催しました。日本から持って行った照明器具を使おうと電圧変換器で電圧を変換し、撮影技術の指導も無事できました。職員のみなさんは真剣に受講されていたので、これからは素敵な写真が撮れるようになることでしょう。また、ピダン・クメールで販売している小物商品の撮影も、ほぼ2日間かけて進めることができたので、これからはインターネットを通じたオンライン販売の準備もはかどるでしょう。

膨大な点数から選りすぐった写真の一点ずつが、カレンダーやハガキの画面を通して絵絣ピダンの魅力をたくさんの人に伝え、織物への理解を深める助けになればよいと願っています。



椰子の葉越しに揺れる光を捉えようと、集中する熊谷カメラマン。織物センターの中庭を風が通る。撮影高橋智史（タケオ州バティ郡トロピエンクラサン村にて）



タケオ州の寺院、ワット・オンオンダエットで撮影中の熊谷氏。天井を飾るピダンは村の織り手が寄進したもので、今は見かけることが少ない。昔ピダンを織っていたお婆さんたちの姿もありました。

熊谷正
写真家

2015
Calendar

カンボジアの絹絵絣・ピダン



撮影：熊谷正

カ
レ
ン
ダ
ー
・
表
紙



絵
は
が
き

CYR 2015年カレンダーと絵はがきセット（8枚組）ができました。テーマはカンボジアの誇り、伝統絹絵絣「ピダン」です。CYKの織物を、写真家・熊谷正氏がカンボジアの風景の中で特別撮影していただきました。ご自宅の壁に、プレゼントにお求めください。

※詳細は同封の申込書をご覧ください。
※カレンダー・絵はがきの見本はHPでご覧いただけます。

子どもたちの明日 111号

発行日：2014年9月17日 発行者：深水 正勝

特定非営利活動法人幼い難民を考える会

東京事務所 (CYR)

〒110-0016 東京都台東区台東1-12-11 青木ビル2A

TEL: 03-6803-2015

FAX: 03-6803-2016

E-mail: info@cyr.or.jp

URL: http://www.cyr.or.jp

プノンベン事務所 (CYK)

#170, St.63, Boeung Keng Kang I, Khan Chamkarmorn,

Phnom Penh, Cambodia

TEL: (+855) 23 210849

FAX: (+855) 23 210849

Email: info@cyk.org.kh

URL: http://cyk.org.kh/

幼い難民を考える会 (CYR) は認定 NPO 法人です。
ご寄付は税制優遇措置の対象となります。